

3) 当財団所蔵資料の修理・復元事業

鶴田 大¹・高嶺瑞貴¹・宮城奈々¹・幸喜明子¹

キーワード：山口宗季 関羽像 共裏沈清泰 聯 魏恭侯 色材科学調査 カラーフィル 漆塗膜 麦漆 膠液
尚育王 首里八景詩 臨書技法 敷写し技法 紹織染分地 黒朝衣 加湿整形 文化財保存 類例調査

1. はじめに

本事業は、首里城基金を活用して実施する当財団所蔵資料の修理および復元事業である。劣化が著しい資料および首里城火災により被災した資料を対象に、科学的調査および伝統技術に基づく修理・復元を行い、その歴史的・文化的価値の保存と継承を図ることを目的とする。

令和6年度においては、修理業務は漆器12件中7件が完了し、5件が継続となり、陶磁器は5件中4件が完了、1件が継続であった。絵画では2点の修理を完了し、書跡では復元製作1件について試作を実施した。また、染織では4点の復元製作が試作・調査段階として進行した。

今年度は、陶磁器について収納箱10件の製作を行った。漆器は8件中3件の修理を完了し、5件は次年度に継続することとなった。絵画は1点の修理を完了し、書跡では1件の修理を完了するとともに、復元製作1件について本製作を実施した。染織では保存処置2点を完了するとともに、復元製作4点のうち1点が完成し、3点は次年度に継続することとなっている。

2. 修理

1) 絵画分野 (主担当：鶴田)

本事業は当財団所蔵の山口宗季筆『関羽像』の修理業務であり、料紙・色材の分析調査も実施した。

山口宗季(呉師虔 1672-1743)は首里王府の代表的な絵師で、福建派の主要人物である孫億らに師事し、本格的な福建派の絵画技法を習得したことや国王の御後絵制作などで知られる。現存の代表作としては本作のほか『神猫図』(那覇市歴史博物館蔵 県指定文化財)などがある。今回の修理では、本紙(絹本)の裏打ちに紙(楮紙)ではなく絹を用いる共裏(伏せ裏)技法が用いられていることが最大のテーマとなった。共裏技法が本紙のダメージ(折れ・歪み)に大きく関与しているとみられたからである。

裏打ちに絹を用いる共裏技法は古くから知られ、主に中国で行われていたとされるが、その事例はきわめて少なく、財団所蔵絵画の修理においても初めてのケースである。

共裏技法では、本紙(絹本)と裏打ちの絹本が非

常に強固に圧着され、剥離作業が非常に困難である。本作品については数十年前に解体修理が施されたことが知られており、その際には本紙(絹本)と裏打ち(絹本)の剥離が困難で、そのままにして他の修理を実施している。今回は、数十年前よりも進歩した表装修理技法である「乾式技法」で共裏の剥離を試みた。試行錯誤を重ねたが結局、共裏の剥離作業は断念することとなった。剥離作業が本紙(絹本)に多大な損傷を与えることが明らかになったからである。このため共裏はそのままに、折れ・欠損部分の補修を行い、裏打ちの絹本のさらに裏に施す補強紙(増し裏・総裏)を工夫し、また通常より直径の大きな太軸(太巻き添え軸)を用いることによって、今後の折れ・損傷の軽減化を図るようにした。

また、今回の修理業務により、共裏が単なる表装技法にとどまらず、本紙(絹本)の描写に深みを与えていることが実験により明らかになった。裏打ちの絹を無理に紙に変更することは、絵画表現自体へのマイナスの影響が考えられるわけであり、本業務で共裏を残して修理を仕上げることを決定したもう一つの理由である。

当財団には本紙が絹本である中国絵画・琉球絵画が相当数あると考えられ、本事業で明らかになった共裏技法の意味合いは、今後の修理業務や、絵画表現の調査・研究に大きな意味を持つ。本業務の成果を整理して、あらためて調査・考察を続けたい。(写真-1)

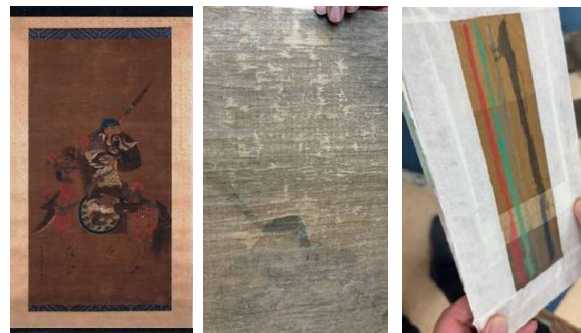


写真-1 共裏技法の議論・試験を重ねた(京都・墨仙堂)。左側画像が修理前の折れ・損傷の著しい本紙(絹本)。中央画像は修理中に確認した本紙裏面の共裏の様子。右側画像は、裏打ちの試験の様子。絹本に色材を塗布し、さまざまな種類の楮紙・絹布で裏打ちを施し、色材の見え方を確認した。

¹ 琉球文化財研究室

2) 書跡分野 (主担当：鶴田、副：高嶺)

本事業は当財団所蔵の『沈清泰 書』の修理業務である。解体修理と同時に料紙分析調査も実施した。

本作品は清朝の官僚である沈清泰から、進貢使として中国へ赴いた琉球の魏恭儉(神山親雲上)へ贈られたもの。書写年代は魏恭儉が進貢使として中国へ訪れた道光二十二年(1842)年頃とみられる。中国の文人から琉球の文人に贈られた書のほとんどが琉球を訪れた冊封使らによるものであり、本作品のような事例は非常に珍しい。

本作品は対句の漢詩を揮毫しており、元々ほとんど二幅対だったとみられるため、現在の一幅仕立てから原装に戻す方針で解体修理が進められた。しかし実際に解体してみると、予想以上に損傷が著しく、本紙中央部分の継ぎ目の重なりも少ないことが判明した。つまり、当初は二幅対だった本作品の本紙の周辺部分(本紙の端の部分)の傷みが進んだため、損傷の著しい周辺部分を取り除いて一幅に仕立て直した経緯が考えられる。

このため当初の計画を変更し、折れ・破れなどの損傷箇所を修理したのち、あらためて修理前の一幅の状態に復すこととした。

また、以前に修理時に、欠損部分に「他の部分の本紙」を使って補修した部分があった。本紙中央の最上部分の目立つ箇所であり、対応について議論となった。新たに色合わせした補修紙を充てると、違和感が生じることから、以前の修理時の「他の部分の本紙」を活かしたまま再度修理をおこなった。

当初の形態であったらう二幅対の状態に復すことができないのは残念であったが、本紙の修理を施し、また金銀箔の散らされた絢爛たる本紙に似合わない質素な表装切から本紙の豪華さや、揮毫した文人にふさわしいコウモリ文を含む吉祥丸繋ぎ文の緞子に変更したことで展示にふさわしい状態に仕上げることができた。中国へ赴いた琉球の文人が現地の文人とおこなっていた文化交流を示す具体的な資料としても本作品の文化的価値は大きく、今後、展示や調査・研究によって広く親しまれてほしいと考えている。(写真-2)

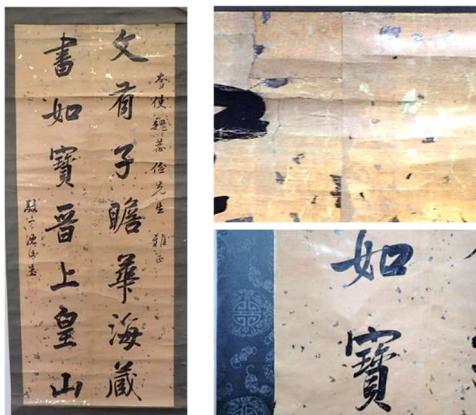


写真-2 左が修理前の本作品。右は本紙の重なり(中央部分)と以前の補修箇所(左上部分)の画像。本紙の重

なりが非常に少なく、補修部分には別の部分の本紙が使われていることがわかる。右下は本紙の修理がある程度進んだ段階で、新たな表装裂を合わせている画像。

3) 陶磁器分野 (主担当：鶴田)

本事業では、令和2年度以降に手がけてきた被災陶磁器類12件についての修理作業後の状態の再確認を行うとともに、収納箱の無い9件について、被災による脆弱化を加味した謎の収納箱の設計・製作を実施した。

被災陶磁器類12件のうち、一般的な美術工芸品として展示しうるものは『呉須線彫牡丹文水注』『琉球焼龍水差』の2点であり、その他については欠損や熱による表面の変質・変色などが認められ、今後は「被災資料」として保管・活用していくことになる。これら12件の修理作業後の状態については概ね良好であったが、火災時の急激な温度上昇・冷却による著しい脆弱化は認められるため、引き続きの経過観察が必要となる。これらの調査データは今後の重要な資料となる。

収納箱の設計・製作については、すでに昨年度に大型の壺屋古典焼の『水盤』の収納箱製作というかたちで実施している。『水盤』については水を循環させたとみられる龍柱部分の損傷以外の水盤本体部分の破片は全て揃っていたが、火災の熱変化による微妙な変形があり、全ての破片の接合の際に、そのズレを無理に合わせないよう注意した。当然、接合後の脆弱性には引き続き注意を要するため、常に載せておける台座を設けて、台座のままで収納・移動・展示が行えるように工夫した。今年度の9件の収納箱の設計・製作についても同様の工夫を施した。たとえば『多聞天立像』については移動作業などに際して脚部への過度な荷重がかかる恐れがあるため、台座と本体を別々に保管すべく収納箱を謎えた。さらに本体については箱の底面がそのまま展示台になるよう設計し、収納時は側面を被せ、梱包材(支持材)を四隅に入れて、さらに天板をはめることができるような構造を設計し、収納箱を製作した。これにより、保管・移動・展示に際しての本体への荷重負担を最小限に抑えることができる。

今年度の収納箱製作を以て、被災陶磁器類の修理はいったん完了となる。被災以降の修理においては、カラーフィル技法による破片の接合や、収納箱の謎えなど、多岐にわたる試みがあった。これらの記録は火災による陶磁器資料の修理・保管・活用における重要な資料になる。引き続き被災陶磁器類の状態観察を継続し、十分な保管・活用を心がけたい。(写真-3)



写真-3 多聞天立像の収納箱：台座は別の収納箱とした。本体の台座が収納箱の底面になるようにした。収納の際には、梱包材（支持材）を十分にあしらったのちに側面・天板の順にはめ込むような構造に設計した。

4) 漆器分野（主担当：高嶺、副：幸喜(明)）

火災の影響を受けた漆器の修理については、これまで漆工品の修理実績がある室瀬和美氏監修のもと松本達弥氏を技術指導として業務委託し、東京文化財研究所には科学的な見地から助言を頂きながら琉球漆工藝舎と株式会社目白漆芸文化財研究所(以下「目白漆芸文化財研究所」という)のそれぞれの技術者と連携し多角的に修理に取り組んでいる。

資料全般の修理においては、クリーニング、漆塗膜の押さえ、損傷部の補填、漆塗膜の補強を行なっている。

(1) 琉球漆工藝舎による修理

琉球漆工藝舎には 2 件の修理業務を委託した。うち今年度修理完了 1 件、次年度継続 1 件である。3 年計画の 2 年目である沖縄県指定文化財『黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠』は火災の影響により塗膜剥離が著しく、高度な塗膜押さえの技術が必要とされる。特に食籠の上段の塗膜状況は細かな亀裂や剥離、柔軟性が失われている状況であるため、塗膜の押さえで使用される材料の再検討を行った。選定された材料として、仮養生の役割や柔軟性を失った塗膜に若干の水分与え柔らかくすることができる膠、生漆と水練りした小麦粉を混ぜ合わせ溶剤で濃度を調整した麦漆を適宜選択し、時には併用した処置を行い安全に安定化している。

蓋および下段はクリーニング、塗膜押えを実施した。資料を保管するために梱包されていた薄葉紙の繊維が器物から滲出したとされる茶褐色の液体により貼りつき、繊維が付着されていたが、クリーニングにより除去ができた。

次年度も引き続き塗膜押えやクリーニング、亀裂に刻苧（麦漆に木粉や地の粉を入れたもの）を充填する作業を行う予定である。



写真-4 塗膜押さえの様子



写真-5 細かな剥離が生じている塗膜



写真-6 完了検査

(2) 目白漆芸文化財研究所による修理

目白漆芸文化財研究所には 5 件の修理業務を委託した。うち今年度修理完了は 2 件、次年度継続 3 件である。そのうち 2 年計画の最終年度にあたる『黒漆牡丹唐草沈金食籠』の修理では、漆塗膜の浮きや亀裂、過去の修理跡が見られたため、前年度に引き続き、漆塗膜の押さえ、下地付け、錆付け、漆固めの処置を行った。本資料は過去の修理により部分的に塗料が塗られており、牡丹唐草文様の沈金加飾にも被さっている箇所があった。この塗料に関しては、塗料の下層に元の漆塗膜が確認された箇所のみ除去を行った。塗膜押えでは、溶剤で濃度を調整した麦漆を塗膜剥離箇所の際から、筆などを用いて含侵し、塗膜表面に麦漆が残らないよう拭き取った後、竹ひごを用いた心張り法やクランプを用いて圧着した。触手などによる塗膜の剥落を防ぐため亀裂や損傷箇所には下地と錆付けを行い、錆漆が乾固した後、仕上げに漆固めを行った。



写真-7 黒漆牡丹唐草沈金食籠 修理後



写真-8 完了検査

5) 染織分野 (主担当：宮城、副：幸喜(明))

本年度は、当財団所蔵の染織資料「黒朝衣」および「芭蕉衣裳」2点を対象に、佐賀大学の石井美恵氏の指導の下、調査記録および保存処置を実施した。

(1) 実施内容

当財団那覇事務所にて、6日間にわたり対象資料の調査記録および保存処置を実施した。処置はワークショップ形式で行い、関係機関学芸員および大学院生等が参加した。主な処置内容は以下のとおりである。

- ・表面清掃 (空拭き)
- ・加湿整形 (皺の伸長および形状安定化)
- ・処置工程の記録作成
- ・画像および関連文献資料の整理

(2) 成果

特に加湿整形については、ポリエチレンシートおよび湿潤ガーゼを用いた段階的な加湿処置により、繊維に過度な負荷を与えることなく皺を伸長し(写真-9)、形状の安定化を図ることができた。

この処置により、

- ・着装形態の再現性が向上
- ・保管に適した状態へ改善

が確認された(写真-10、11)。

また、加湿処置で皺が伸びたことにより、これまで不明であった衣裳の詳細な情報が得られ、充実した基礎データを蓄積した。

さらに、ワークショップ形式で実施したことにより、実践的な保存修復技術の共有と人材育成の機会となった。



写真-9 ポリエチレンシートの上に黒朝衣を広げ、湿潤ガーゼで覆う



写真-10 黒朝衣 (左) 加湿整形処置前、(右) 処置後

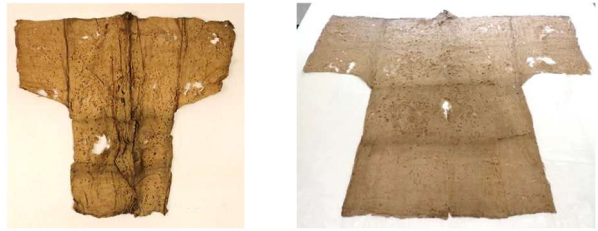


写真-11 芭蕉衣裳 (左) 加湿整形処置前、(右) 処置後

3. 復元

1) 書跡分野 (主担当：鶴田)

本事業は、焼失した尚育王自筆『首里八景詩』の復元製作(本紙揮毫)をおこなうもので、昨年度の試作に続く本製作である。書跡美術における模本製作技法は千年以上にわたる長い伝統がある。書聖・王羲之(おうぎし 303-361)の代表作『蘭亭序』『喪乱帖』などはいずれも原本が現存しないが、多くの模本が中国・日本ほかに現存しており、その優れたものは国宝指定を受けるなど文化財として大切にされている。本事業における復元製作も、そのような文化財としての位置付けを持つべき模本を製作しようという意気込みを以て臨んでいる。

技法的には伝統的な臨模技法と敷写し技法である。ただし写すべきは原本ではなく原本の原寸画像である。また敷写しにおいてはライトボックスを用いている。料紙が模写用の薄紙でなく本紙同様の宣紙であり、一定の厚みを持つため、ライトボックスは必須といえる。とはいえ敷写しはあくまで補助的な手段であり主眼は臨模である。

昨年度までに用いるべき料紙・墨・印泥および筆・硯について調査・試験を繰り返し、今年度はその成果をもとにさらに原本に近づけるよう努力した。紙は昨年度に探し当てた倣古宣紙を用いた。墨は、昨年度は倣古の油煙墨を用いたが、やや墨色や粘性に違和感があったため、清代の油煙墨(※尚育王同時代の墨)に変更した。硯も墨に合うような質感の端溪の太史硯に変更した。大ぶりの硯であり、大量の揮毫の際に墨色の変化が生じないための工夫でもある。筆は昨年度同様に、和筆(豊橋の伝統技法による小筆)を用いた。本来は中国筆であろうが、筆先の命毛が磨耗したらすぐに筆を取り換えて描く必要があるために、品質が安定している同一種の和筆を数十本単位で揃えた。

また昨年度までは原本の文字の形状と筆勢の再現に主眼を置いたが、「原本は墨継ぎの自然な濃淡が表情の豊かさを生んでいる」という有識者(運天南陽氏)の意見を考慮し、墨色の濃淡の再現にも注意を向けた。試行錯誤の末、筆に含ませる墨量と、運筆の速度の緩急を細かく調整していくことによって、墨色の自然な濃淡の再現に成功した。

原本の揮毫においては生じないような問題の解決方法(長時間にわたって硯の墨色を同一に保つ工夫、原本では自然に生じる墨継ぎの呼吸を用筆技法で再現など)を一つ一つ解決していくことに

よって、模本としての質を向上させるとともに、古来の模本技術をより具体的に体现(再現)できたのは本事業の重要な成果と言える。

本製作品(本紙揮毫)は次年度に表装を施して書帖として完成をみる予定となっている。また一連の尚育王書跡の復元という意味では本事業による「首里八景詩」が3件めであり、次年度開始の尚育王筆「千字文」復元を以て全4件が仕上がる(写真-12)。



写真-12 模写工程：原本の原寸コピーを用いつつ、伝統的な臨書・敷写し技法で模写を繰り返す。昨年度試作の後、用筆技法の工夫により原本の墨継ぎの濃淡を再現できた。

2) 染織分野(主担当：宮城、副：幸喜(明))

本年度は、被災染織資料4点について復元製作および調査研究を実施した。

(1) 紹織染分地鶴に松梅菊両面紅型胴衣

本資料については、調査・白生地製作・下絵作成・試作を経て、古紅型研究会群星による両面紅型の本製作が完了した(写真-13、14)。

これにより、

- ・両面染め技法の再現
- ・文様構成および配色の復元

が達成され、復元製作の主要工程が完結した。

(2) その他復元資料

- ・「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型袷衣裳」
白生地製作および採寸を完了し、復元工程を進めた。
- ・「黒朝衣」
共同研究により、芭蕉糸の処理方法および天然 藍の使用を科学的に解明し、復元製作の基礎条件を確立した。
- ・「紬黄色地ムルドウッチリ袷衣裳」
原資料調査および採寸を実施し、琉球多産蚕からの真綿紡ぎおよび図案作成を行った。

(3) 類例資料調査

今年度は、復元製作の精度向上を目的として、「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型袷衣裳」の類例資料調査を3回実施した。

調査対象は以下の通り

- ・鎌倉芳太郎資料中の型紙資料(沖縄県立芸術大学附属図書芸術資料館所蔵)
- ・型紙資料(沖縄県立博物館・美術館所蔵)
- ・黄色地七宝雪輪に梅桜楓文様衣裳(名古屋松

坂屋/(一財)J.フロントリテイリング史料館所蔵)

各調査により、

- ・型紙の材質および型紙の彫り
- ・糸掛け
- ・文様構成および配置
- ・配色および染色表現
- ・衣裳形態および仕立て

に関する具体的な比較資料を得ることができ、復元対象資料との技術的・意匠的關係を検討する基礎情報を整理した。



写真-13 完成した紅型



写真-14 完成した型紙

4. 外部評価委員コメント

1) 経年劣化資料の修理について

佐賀大学との共同研究として、経年の皴損修理である加湿形成の実施は高く評価できる。絵画の修理の新知見として琉球絵画の「伏せ裏」技法が分かったことは大きな成果である。

今後は、専門学会の研究報告やメディアを活用して琉球文化財の素材や技法情報として広報普及することを望む。予算執行や工程も順当である。

(宮里正子研究顧問)

2) 被災資料の修理・復元について

財団として優先される事業である。被災資料の修理や復元には、想定外の時間や予算も発生する中で、漆芸修理者人材育成のためのセミナーや土曜講座の実施は高く評価できる。予算執行状況が満額でない理由の検証が必要である。

(宮里正子研究顧問)